

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2012～2014

課題番号：24242018

研究課題名(和文)外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究

研究課題名(英文)Fostering plurilingual and pluricultural competence through continuous foreign language education

研究代表者

境 一三(SAKAI, Kazumi)

慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：80215582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 20,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中学段階からの外国語教育において、その一貫性を高めるとともに、複言語・複文化能力を養成することを目的とする基礎的研究である。重点項目を「第二外国語既習クラスの実態調査」、「カリキュラム研究」、「教材開発」、「気づき研究」の4点に置き、活動を行った。

特に注力したのは、大学の第二外国語既習者クラスの実態調査で、質問紙による調査を実施した。

この他、ドイツ、イタリア、ルクセンブルク、フランス、スイス、中国、アメリカの幼稚園、小・中・高等学校で授業を視察し、担当の教員や関係官庁、大学の研究者に聞き取り調査を実施して、早期複数言語教育と複言語能力育成などについて情報を収集し、知見を高めた。

研究成果の概要(英文)：The goal of this study is to reinforce articulation in Keio's foreign language education starting from middle school, and to foster plurilingual and pluricultural competence of students.

The research was divided into four categories ("a field study of students who have already learned a second foreign language at highschool," "curriculum research," "material development," and "awareness raising research").

The research primarily focused on a field study of university courses for students who have already learned a second foreign language at highschool. We had students and faculty members fill out a questionnaire and analysed the results. We also sat in on kindergarten, elementary school and middle school classes in Europe, China and the USA. There we had the teachers in charge and university specialists participate in an interview, and collected data on early foreign language education and the fostering of plurilingual competence. These activities widened our knowledge on the subject.

研究分野：言語教育学、応用言語学

 キーワード：複言語・複文化能力 複数言語教育 第二外国語教育 一貫教育 教育の継続性 英語教育 言語政策  
CEFR

## 1. 研究開始当初の背景

日本の外国語教育研究は、従来言語政策や言語教育政策のマクロな観点から研究されることが少なく、教育全体における位置づけや、社会的なインパクトに関して、必ずしも十分な研究が行われてきたとは言えない。多くの場合、教授法的なミクロの観点から文法や語彙の教育はどうするかが語られ、せいぜいが読み・聴き・話し・書く能力をいかに養成するかという言語内要素に密着した議論が行われてきたに過ぎない。近年になってようやく生涯学習などの視点から自律的学習者養成や学習方略といったことがテーマ化されるようになったが、言語学習者の社会的視野の拡大や、同一社会内における異言語・異文化や弱者との共生といった視点で言語教育が語られることはまだまだ少ない。

慶應義塾大学外国語教育研究センターでは、2006年以来文部科学省「私立大学高度化推進事業」学術フロンティア「行動中心複言語学習プロジェクト」(AOP プロジェクト)でこれらの理念と取り組み、「行動中心主義」や「複言語・複文化能力」といった欧州の言語教育で重視されている理念に立脚した外国語教育のあり方を追求してきた。

一方で、幼稚園(小学校)から大学院まで行われている英語教育は、紛れもない外国語教育の中核であるが、それが縦の接続と横の連携の不足から、必ずしも十分な成果を上げられてこなかったことの反省に立って、英語一貫教育の研究も行ってきた。つまり、複言語・複文化能力育成の研究と英語一貫教育の研究は行ってきた。しかしながら、慶應義塾の高等学校段階で長年行われ、近年中学校段階でも選択授業で実施されるようになった第二外国語教育の一貫性の問題はまだ本格的な研究が行われていない。

世界的に見た場合、外国語教育はすぐれて中等教育の課題である。また、近隣諸国を見ても、中等教育で第二外国語教育を必修として行っていない日本は例外的存在である。複言語・複文化能力育成を考えるときには、上記の教育実践をもつ慶應義塾は日本では稀に見る好条件を備えていると言えよう。この学舎こそ、複数の言語と文化の能力を持ち、外に向けて日本を発信できる人材ばかりでなく、外国人の流入と共にますます多言語化する日本社会における次代のリーダーを養成する義務を持たなくてはならないという認識が、本研究の出発点であった。

## 2. 研究の目的

日本ではまだ本格的に行われていない、英語を含む複数の外国語の一貫教育における複言語・複文化能力育成のための理論的・実践的基盤整備を目的とする。具体的には、語種を横断した横の連携を確保しつつ、中学・高校・大学といった学習段階の縦の接続を十全に機能させて、生徒・学生の複言語・複文化能力を養成するために、人材養成を含む教

育システム作り、カリキュラム・教材・教授法の開発を行う。海外において日本を代表して発言できる能力を持つだけでなく、多言語化する日本社会のリーダーとして、異言語・異文化に開かれた態度、社会的マイノリティーや言語的弱者に対する「気づき」の能力を備えた人材作りに向けた統合的研究である。本研究の三年間はそのための基盤作りと具体的モデル作りを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 外国語教育の一貫性に関しては、慶應義塾内の第二外国語と連携研究者の本務校における英語教育の一貫性の現状に関する実態調査を行った。前者では、大学の第二外国語既習クラスに在籍する学生と担当教員に対して、質問紙による調査を行った。

(2) 複言語・複文化能力と「気づき」の育成の観点から、アメリカ合衆国、中国、ドイツ、ルクセンブルク、イタリア、スイス、フランスにおける初等中等教育の実態調査を行った。特に、就学前教育、初等教育から複数言語能力養成を行っている教育機関の視察に重点を置いた。

(3) 言語・文化に対する「気づき」の育成のために、すでに日本、ヨーロッパで作成された教材の分析を行い、日本の現場に適合した教材の試作を行った。

(4) 複言語・複文化能力と「気づき」の育成のための教員養成とカリキュラム・シラバスモデル作りの観点から、先進的な教育を行っているイタリア・アルトアディージェ州で、大学における教員養成の実態を調査した。また、ルクセンブルク、イタリア、スイス、フランスなどでは、現場の教員だけでなく、教育委員会や担当官庁の職員、また政策立案に関わる大学教員に対する聞き取り調査を行った。

(5) 本研究は、拠点を慶應義塾大学に置いたが、電子的媒体などを通じて、常に他大学の連携研究者とも連絡を保ちつつ研究を進めた。テーマごとに適宜研究会を行い、年に1~2回の全体集会で意見交換を行い、相互に知見を共有した。

## 4. 研究成果

(1) 慶應義塾における第二外国語教育の一貫性に関する調査：

本研究は、フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語の4言語で行ったアンケート調査結果について考察を加えたものである。

日本の高等教育における第二外国語学習では、フランス語とドイツ語が長い間大きな役割を果たし、その成り立ちや歴史についても共通項が多い。これと比較した場合にいわば「新しい第二外国語」となっている中国語とスペイン語は、学習と教育の実態において相当程度性格を異にするのではないかと想像されたが、今回の調査の結果、言語選択理

由という面において両者の間に 相違が見られたことは、そうした予想が一定程度裏づけられたと言える。

本アンケート調査では、学習者の初期動機に「文化」が果たす役割の大きさが改めて明らかにされた。しかし同時に、被験者たちは高等学校在籍中に、必ずしも十分な文化学習ができたとは思わないという意識を持っていることも明らかになった。

また、高大言語教育の連携の必要性が強く意識されているにもかかわらず、それが必ずしも実現されているとは言えない実態も明らかになった。

学習者の要望も反映させつつ、より良いシステムを構築することは、教員たちが、学習者と協力して少しでも理想的な学習環境を作ることにつながり得る。このような形で、熱心な教員たちの日々の努力が結実することは、教員・学習者双方にとって望ましいことと言える。

(2) 複言語・複文化能力と「気づき」の育成に関する調査：

先進的な教育を実践している現場(就学前教育から高等学校まで)特に幼稚園段階から複数言語による教育を行っている教場を中心に視察することによって、その可能性を確認するとともに、多言語・多文化化する日本社会における複言語・複文化能力育成のためのカリキュラム作りに対する基礎的知見を獲得した。

また、スイス・ジュネーブ市の EOLE 教育の現場を視察し、使用されている教材をつぶさに研究することによって、日本の小学校における外国語活動の展開に多大の示唆を得た。

EOLE、欧州評議会の CARAP、奈良教育大学の吉村雅仁教授、早稲田大学の山西優二教授らの教材作成の成果を踏まえ、大学生の複言語・複文化能力養成のための教材を試作した。

なお、教員養成は本研究では必ずしも力点を置いた研究項目ではなかったが、イタリア・アルトアディージェ州ボルツァーノ自由大学の教員養成課程とコンタクトを持つことができたので、複数言語に対応した教員養成の実態を調査し、日本の教員養成に参考になる多くの知見を獲得した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 18 件)

境一三、「『ヨーロッパ言語共同参照枠』(CEFR)は日本の外国語教育に何をもちたか?」、『多言語・複言語研究』、査読無、第一号、2014 年、34-52 頁

小川敦・大澤麻里子、「複言語教育政策のありかたをめぐる:イタリア・ヴァッレダ

オスタ特別自治州とルクセンブルク大公国の政策の比較」、『言語政策』、査読有、第 10 号、2014 年、95-122 頁

平高史也、「ウエルフェア・リングイステイクスから見た言語教育」、『社会言語科学』、査読有、第 16 巻 1 号、2013 年、6-21 頁

藁谷郁美・マルコ・ラインデル・白井宏美・太田達也・倉林修一、「外国語学習のあらたな地平:慶應義塾大学 SFC ドイツ語教材開発研究プロジェクトの取り組み」、『Sprachwissenschaft Kyoto』、査読有、第 11 号、2102 年、77-93 頁

〔学会発表〕(計 28 件)

境一三・大澤麻里子・小川敦、「イタリア・南チロルにおけるドイツ語教育:ラディン語地域における複言語教育を中心に」、『日本独文学会秋季研究発表会、JGG-Herbsttagung 2014、京都府立大学、京都市、2014 年 10 月 11 日

吉川龍生・山下一夫、「慶應義塾の第二外国語教育における高校・大学の連携についての意識調査:中国語を中心に」、『中国語教育学会第 12 回大会、大東文化大学、東京都、2014 年 6 月 8 日

治山純子・丸田千花子、「慶應義塾の第二外国語教育における、高校・大学の連携に対する意識調査 フランス語教育に関するアンケート結果の報告」、『日本フランス語教育学会、2014 年度春季大会、お茶の水女子大学、東京都、2014 年 5 月 24 日

Ohta, Tatsuya, "Was lernen Lernende vom Lehrerfeedback? Empirische Untersuchung zur Wirkung verschiedener Korrekturverfahren auf die formale Korrektheit von Lernertexten", 『日本独文学会春季研究発表会、東京外国語大学、東京都府中市、2013 年 5 月 25 日

平高史也、"Feldforschungsprojekte als Brücke vom Sprachunterricht zum Fachstudium: ein Erfahrungsbericht von einer japanischen Universität", 『中華國徳語文學者暨教師協會年會及國際術學研討會、國立高雄第一科術大學(台湾)、2012 年 10 月 20 日

〔図書〕(計 3 件)

宇振領・千田大介・長堀祐造・根岸宗一郎・吉川龍生編、『例文で覚える・中国基本単語 3000』、慶應義塾大学出版、2014 年、248

関正昭・平高史也(編)、村上京子他著、『テ

ストを作る』、スリーネットワーク、2013 年、  
255

山下一夫・川浩二・廉舒、『おとなりは中国人 中国語入門』、好文出版、2013 年、1  
27

〔産業財産権〕  
出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

本研究の報告書は、以下の URL に PDF として公開している。

[http://skazumi.com/sakai\\_kaken\\_hokoku2015.pdf](http://skazumi.com/sakai_kaken_hokoku2015.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

境 一三 (SAKAI, Kazumi)  
慶應義塾大学・経済学部・教授  
研究者番号：80215582

### (2) 研究分担者

笠井 裕之 (KASAI, Hiroyuki) (平成 24 年度・平成 26 年度)  
慶應義塾大学・法学部・准教授  
研究者番号：10265944

鈴木 雅子 (SUZUKI, Masako) (平成 24 年度のみ)  
慶應義塾大学・外国語教育研究センター・助教  
研究者番号：10588560

治山 純子 (HARUYAMA, Junko) (平成 25～26 年度)

慶應義塾大学・外国語教育研究センター・助教  
研究者番号：50708451

平高 史也 (HIRATAKA, Fumiya)  
慶應義塾大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：60156677

丸田 千花子 (MARUTA, Chikako)  
慶應義塾大学・経済学部・准教授  
研究者番号：00548414

山下 一夫 (YAMASHITA, Kazuo) (平成 25～26 年度)  
慶應義塾大学・理工学部・准教授  
研究者番号：20383383

吉川 龍生 (YOSHIKAWA, Tatsuo)  
慶應義塾大学・経済学部・准教授  
研究者番号：30613369

### (3) 連携研究者

荒金 直人 (ARAKANE, Naoto)  
慶應義塾大学・理工学部・准教授  
研究者番号：10445455

大澤 麻里子 (OSAWA, Mariko)  
東京大学・大学院総合文化研究科・特任講師  
研究者番号：10445455

太田 達也 (OHTA, Tatsuya)  
南山大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：50317286

小川 敦 (OGAWA, Atsushi)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・講師  
研究者番号：00622482

古石 篤子 (KOISHI, Atsuko)  
慶應義塾大学・総合政策学部・教授 (平成 24～25 年度)、名誉教授 (平成 26 年度)  
研究者番号：20186589

篠原 俊吾 (SHINOHARA, Shungo)  
慶應義塾大学・法学部・教授  
研究者番号：10276404

鈴木 雅子 (SUZUKI, Masako)  
慶應義塾大学・外国語教育研究センター・講師 (平成 25～26 年度)  
研究者番号：10588560

西納 春雄 (NISHINO, Haruo)  
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授

研究者番号：50172680

蓮見 二郎 (HASUMI, Jiro)  
九州大学・大学院法学研究院・准教授

研究者番号：40532437

福田 浩子 (FUKUDA, Hiroko)  
茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：60422177

村越 貴代美 (MURAKOSHI, Kiyomi)  
慶應義塾大学・経済学部・教授

研究者番号：50239513

藁谷 郁美 (WARAGAI, Ikumi)  
慶應義塾大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70306885